

「情報の扱い方」を 身につけて 思考力を高める

今号は、新しい学習指導要領に新設された「情報の扱い方に関する事項」について取り上げます。

学習指導要領の中での位置づけや扱い方について、樋口直宏先生（筑波大学教授）にQ&A形式でお答えいただくほか、西勝巳先生（関西大学初等部）による五年生の授業「想像力のスイッチを入れよう」をご紹介します。「情報の扱い方」を身につけることで、思考力をいっそう高めることを目指します。



新設された「情報の扱い方に関する事項」とは、新しい学習指導要領の中でどのような位置づけのものなのか、また、その資・能力をどのように育成していけばよいのかについて、樋口直宏先生（筑波大学教授）におうかがいしました。

Q1 「情報の扱い方に関する事項」とは、具体的にどのようなことを求めているのでしょうか。

A1 今回、国語科に新設された「情報の扱い方に関する事項」は、話や文章を全て情報と捉えて、その中から重要なものを取り出したり、整理したり、その関係を理解して使う力を系統立てて示しています（※1）。例えば、昨年十一月に行われた大学入試の試行調査（※2）においても、生徒会部活動規約といった文書やアンケート結果から情報を読み取るとか、会話から情報を読み取って自分の考えを書くといった、情報を多角的・複合的に読み取って表現していく力が求められているのです。PISAの調査以来、論理的な思考力の育

成のためには、こういった読みの力が必要だといわれてきましたが、今回、より具体的に指導事項としてあがってきました。

ただし、これは国語科だけで担うものではありません。総則には、学習の基盤となる資質・能力として、「言語能力」「問題発見・解決能力」と並んで、「情報活用能力」があげられています。「情報活用能力」は、教科等横断的な視点で育成するものであり、教育課程の編成を図るうえで重要なものの一つです。国語科ではその「情報活用能力」のどのような側面を担うべきなのか。教科の特質を生かしながら育成していかなければなりません。今回、国語科に新設された「情報の扱い方に関する事項」は、そのような位置づけの中にあるもののなのです。

※1 小学校学習指導要領（平成29年3月告示）国語
〔知識及び技能〕（2）情報の扱い方に関する事項

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
	（2）話や文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。		
情報と情報との関係	ア 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること。	ア 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること。	ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること。
情報の整理		イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。	イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。

※2 独立行政法人大学入試センターが実施した、大学入学共通テスト導入に向けた試行調査。

2 「情報の扱い方に関する事項」は、授業の中で取り立てて指導すべきなのでしょうか。

「情報の扱い方に関する事項」は、新しい学習指導要領の三つの柱のうち、「知識及び技能」の中に位置づけられています。それは、理解したり表現したりするさまざまな場面で生きて働くよう、「思考力・判断力・表現力等」と相互に関連し合いながら育成される必要があるとされています。順序や理由といった要素を明確化するスキルを身につけるために、取り立てて指導するのも一つの方法ですが、そうした情報の読み取り方や操作のしかたを身につけるだけでは効果的な指導とはいえません。「情報の扱い方」は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」全ての領域に関わる資質・能力であり、これらと組み合わせることで指導の効果が高まるのです。

国語科の授業の中では、短い説明文教材で練習してみるとよいでしょう。例えば、四年「大きな力を出す」では、「はじめ」と「終わり」に述べられている「筆者の考え」について、「それを支える事例」を「中

じ点とちがう点で比べる」という、考えるための技法（思考スキル）を身につけることが目的で、その思考操作を助けるのが思考ツール（ここではベン図）です。思考ツールは、操作が分かりやすい道具なので、クラスの中の思考力の差を埋めてくれる役割もあります。

思考ツールを使った授業で、関西大学初等部の実践に興味深い事例があります。「ワニとキウウリ」をベン図で比較するというものです。突拍子もない組み合わせで、これだけ聞くと、なぜこの二つを比較させるのか分からないかもしれませんが、あまりにも意外な組み合わせだからこそ、共通点と相違点の探しがいるのです。「とげみたいながある」「色が似ている」など、いざ探し始めると、子どもたちはさまざまな共通点を見つけていきます。これらをベン図に整理していきます。

思考操作を重点化することが目的の授業なので、多少のゲーム性をもたせているのが特徴です。ただの情報整理ではおもしろみがないですね。汎用性のあるスキルなので、一度学んでおくと、他の全ての教科で活用することができます。実際、これを学んだあと、他の授業で「AとBはどう違うかな」と問いかけると、子どもたちは

の部分で挙げながら説明していきます。授業では、こうした構造に気をつけて文章の内容を理解していきませんが、一度内容を理解した後に、文章の構造と内容の理解が密接に関係していることを改めて意識づけていくことが大切です。

3 「情報の扱い方」を身につけるために、「思考ツール」を使うことは有効でしょうか。

子どもたちに、ただ「考えよう」と言っても、どう考えたらいいのかわからないものです。「考える」という言葉を「分類する」「比較する」などの具体的な言葉に置き換えて、考えを促すことが大事なのです。

思考ツールは、そのための道具の一つになります。情報と情報との関係を捉えたり、整理したりする段階で役立つといえます。

自主的にベン図を使って考え始めたそうです。

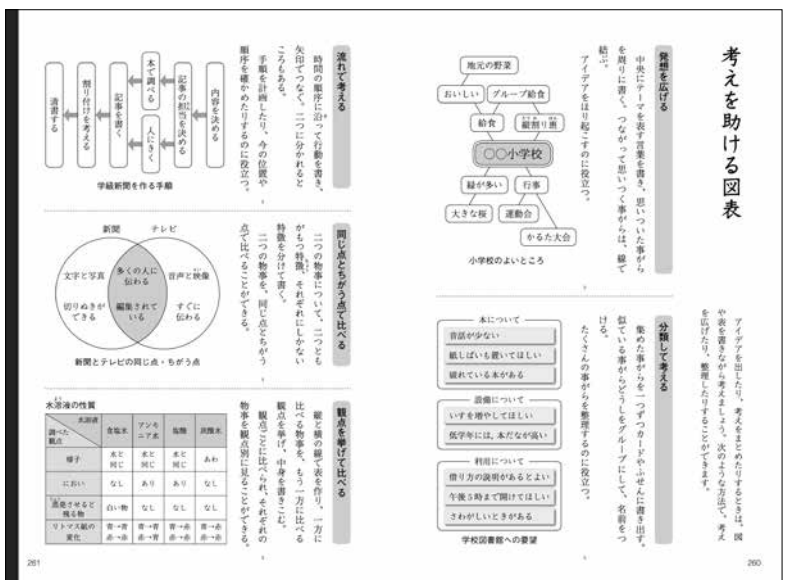
ただ、思考ツールは、あくまで道具の一つなので、これを使うことが目的になってはいけません。

4 子どもたちが、「情報の扱い方」を身につける必然性を感じるには、どんな指導が考えられるでしょうか。

情報を読み取るときよりも、表現するときに、その必然性を感じることが多いと思います。

例えば、プレゼンテーションをするとき、限られた時間の中に伝えたいことを盛り込むためには、情報の精査が必要になります。そして分かりやすく伝えるために主張や根拠となる理由を考え、どこでどのような資料を提示するかなど、必然的に情報の扱い方を工夫することになります。

授業においては、情報を整理しながら思考力を高め、表現に生かせるようになることを目指してほしいと思います。取り立て



▲※3 『国語』6年巻末付録「考えを助ける図表」



樋口直宏

筑波大学教授。1965年東京都生まれ。専門は教育方法学(批判的思考、授業研究、小中一貫教育)。著書に、『批判的思考指導の理論と実践』(学文社)、『実践に活かす教育課程論・教育方法論』(共著・学事出版)など。

指導をはじめ、限られた時間の中ではありますが、楽しい題材やゲームの要素を取り入れながら、六年間の継続的な積み重ねを大切にして読解や表現活動ともつなげてください。そのような授業で培われた力は「情報活用能力」の基盤となるとともに、推理や判断、批評や創造といった、子どもたちが自分の考えを形成することにも結び付くのではないのでしょうか。